

[報 告]

コミュニケーション不安と英語教育

Communication Apprehension and English Education

中村 弘子

NAKAMURA Hiroko

鳥取環境大学紀要

第9号・第10号合併号 2012. 3 抜刷

Reprinted from

BULLETIN OF TOTTORI UNIVERSITY OF ENVIRONMENTAL STUDIES

Volumes 9 & 10 Mar. 2012

〔報告〕

コミュニケーション不安と英語教育

Communication Apprehension and English Education

中村 弘子

NAKAMURA Hiroko

和文要旨: 大学における英語教育では「コミュニケーション型英語教育」が強化され、英語の授業はコミュニケーションの場としての性格を帯びている。本学においてもインテンシブ・イングリッシュが導入され、英語によるコミュニケーションの涵養に重点が置かれているが、コミュニケーション不安の高い学生は積極的なスピーキング活動ができないという問題点も指摘されている。本稿では本学1年生にコミュニケーション不安に関する質問紙調査を行い、コミュニケーション不安値とクラス分けに用いた英語能力判定テストおよび実践英語クラスの成績との相関について調べ、クラス分けに関わる問題点の提示を試みた。

【キーワード】 コミュニケーション不安、インテンシブ・イングリッシュ、クラス分けテスト

Abstract: There has been a strong emphasis on “communicative English education” in college English classes as a place of communication. A major purpose of the TUES Intensive English (IE) program is to increase English communicative abilities. However, the students who have strong communication apprehension find themselves unable to positively participate in speaking activities. This paper will report the findings of an inquiry on communication apprehension and investigate the correlation among English proficiency test, the scores for Practical English and communication apprehension to suggest the problem with placement test.

【Keywords】 communication apprehension, Intensive English, English placement test

1. はじめに

本学の英語教育は2010年度改編が行われ、実践英語AとB、そしてアカデミック英語の3科目からなるインテンシブ・イングリッシュとしてスタートを切った。実践英語は実用英語の習得に重点を置き、Aではスピーキングとリスニング、Bではリーディングとライティングを中心とし、いずれも授業は基本的に英語で運営されている。一方、アカデミック英語は日本語で授業を行い、主に英文法や英文の和文要約に取り組ませている。

クラス分けは2009年度までと同様に能力別編成とし、英語能力判定テスト(財団法人日本英語検定協会)というリスニングテストを含む筆記テストを用い、環境政策経営学科と情報システム学科から成る学科群、環境マネジメント学科と建築・環境デザイン学科から成る学科群をそれぞれ3つのレベルに分け、計6クラスを設けた。初年度を終え、この選択方式の筆記テストだけでは学生

の実践的な英語の運用能力を測ることはむずかしく、上位クラスでも実践英語クラスでの活発な授業参加がむずかしい学生がかなりいるという問題が指摘されている。

本稿では英語能力判定テストでは測り得ない学生のコミュニケーション不安に注目し、本学学生(2010年度入学者)にコミュニケーション不安に関する質問紙調査を行った結果と、英語能力判定テストおよび実践英語の成績等との相関について報告し、今後のクラス分けテストのあり方について考察する。

2. コミュニケーション不安について

コミュニケーション不安の高い英語学習者にとって英語の授業は不安が増幅される場となる。このような外国語学習不安(foreign language anxiety)についての研究は1990年ごろからアメリカを中心に行われ、外国語学習に付随する不安は外国語習得にマイナスに作用するこ

とが報告されている⁽¹⁾。外国語学習不安の研究基盤になっているのは母語使用時の「コミュニケーション不安」である。筆者は吃音者が感じるコミュニケーション不安と日本人英語学習者が英語を話す時に感じる不安が類似していることに注目し、第一言語(L1)コミュニケーション不安について異文化間での比較調査を試みた⁽²⁾。

調査対象者は日本人、アメリカ人、韓国人、台湾人の大学生で、吃音者のコミュニケーション不安を測るスケールとして考案されたESCA (Erickson S-24 Communication Attitudes)⁽³⁾を用いL1コミュニケーション不安値を測定した。このスケールは成人の吃音者の対人コミュニケーションにおける不安値(CA)を測定するために作成されたもので、24の質問項目について、True:あてはまる、どちらかというにあてはまる、False:あてはまらない、どちらかというにあてはまらない、の二択で答えるようになっている。〔稿末 Appendix 参照〕

不安値の一番高いものは24点になり、値が小さいほど不安が少ないことを示す。この調査の結果、日本人学生のコミュニケーション不安値の平均が最も高く、同じアジア人の中でも韓国人、台湾人よりも高いということが示された。

一要因の分散分析を行ったところ、この差は統計的に有意なものであった[F(3,213)=32.62, p<.0001] (表1 下段)。この結果は日本人のコミュニケーション不安はアメリカ人、オーストラリア人、韓国人、中国人、フィリピン人、プエルトリコ人よりも高いことを示した先行研究⁽⁴⁾⁽⁵⁾⁽⁶⁾とも一致している。

表1 L1コミュニケーション不安値の平均

対象者群	平均値	標準偏差	被験者数
環境大生	14.18	4.73	127
日本人学生	13.87	4.06	116
アメリカ人学生	6.46	4.70	41
台湾人学生	12.14	4.04	34
韓国人学生	10.52	4.75	26

(中村、2006)

3. コミュニケーション不安と英語能力

今回、同じスケールを使い2010年度入学者(127名)を対象に質問紙調査を行った。

3-1 被験者と方法

被験者は、鳥取環境大学2010年度入学生127名(環境

政策学科38名、情報システム学科18名、環境マネジメント学科57名、建築・環境デザイン学科14名)であった。

クラスは環境政策経営学科と情報システム学科から成る学科群をA、環境マネジメント学科と建築・環境デザイン学科から成る学科群をBとして、各学科群を3つのレベルに分けた計6クラス(A-1, A-2, A-3, B-1, B-2, B-3)である。

3-2 手順

ESCA (Erickson S-24 Communication Attitudes)を用い、質問紙調査を行った。調査は2010年度前期の中間テスト終了後に実施した。この調査で得られた各学生のコミュニケーション不安値(CA)と英語能力判定テスト及び実践英語の前期の成績、またB-1クラスとA-2クラスについてはクラスの前で発表するパブリック・スピーチの評価との相関を調べた。

3-3 結果

まず表1 上段に2010年度入学生のコミュニケーション不安値(CA)の平均値、表2に不安値の分布を示した。

表3はCAのクラスごとの平均値を示しているが、最もCAの平均値が低かったのはB-2であり、一番上のレベルのA-1はB-3に続いて2番目にCAの高いクラスとなっている。また下位クラス(A-3, B-3)ではCAの値が20から24の高い不安値を持つ学生の数が他のクラスよりも多かった。

表4は英語能力判定テストのスコア、実践英語AおよびBの成績とCAとの相関(r)を示しているが、い

表2 L1コミュニケーション不安値の分布(%)

不安値	割合(%)
0~9	17.3
10~13	31.5
14~19	39.4
20~24	11.8

表3 クラス別コミュニケーション不安値の分布(%)

クラス	N	不安値 M	0~9	10~14	15~19	20~24
A-1	20	14.86	10	40	40	10
B-1	22	14.40	14	32	45	9
A-2	17	13.29	24	41	29	6
B-2	26	12.30	27	31	38	4
A-3	19	14.84	21	16	42	21
B-3	23	15.43	9	30	39	22

表4 CAと成績およびスピーチ評価との関係(相関係数)

テスト	r
英語能力判定テスト	.03
実践英語 A 成績	-.14
実践英語 B 成績	-.08
スピーチ評価 (B-1)	-.64*
スピーチ評価 (A-2)	-.23

ずれも有意な相関は得られなかった。一方、上位クラスの B-1と中位レベルの A-2で前期末の課題として行われたパブリック・スピーチについては、B-1のクラスでスピーチの評価と CA には負の相関 ($p < .07$) の傾向が認められた。

4. 考察と展望

今回の調査で本学の2010年度入学生には比較的高いコミュニケーション不安を持つ学生が多数いることが示された。ところがクラス分けを行った英語の筆記テストのスコアはコミュニケーション不安値と相関がなく、上位レベルのクラスでもコミュニケーションに不安を感じながら授業を受けている学生がかなりいることが示唆された。学生のコミュニケーション不安値と実践英語 A 及び B との相関は認められなかったが、評価方法が授業でのスピーキングの課題だけではなく、出席やライティングの課題等、多岐に渡っていることも一因であると考えられる。一方、CA の平均値が6クラス中一番低かった B-2のクラスが全クラスの中でスピーキングの課題を最も活発に行っているという教員の報告があり、母国語のコミュニケーション不安が少ない学生の方が英語のスピーキング活動で障害が少ないと推察できる。またクラスの前で行うパブリック・スピーチの課題については、B-1のクラスでしかコミュニケーション不安値とスピーチの成績に相関が認められなかったのも、このようなコミュニケーション不安と英語のスピーキング能力との関係については今後の研究課題にしたいと思う。

日本人が英語を書いたり、読んだりするよりも話すことが苦手であることは以前から指摘されているが、筆者は母国語でのコミュニケーション不安が英語のスピーキング能力向上の弊害のひとつになっていると考えてい

る。本学の学生の英語でのコミュニケーション能力を伸ばすためには、従来のような筆記試験による英語の能力判定テストだけではなく、ESCA のようなコミュニケーションに関するアンケートを導入してクラス編成を行い、英語クラスに対する学生の不安感に配慮する必要があると思われる。

謝辞

2010年度入学生の実践英語の成績を提供して下さった本学英語教員のベゴール・ベティーナ先生、竹内ひとみ先生、王 紅先生、ニヤタンガ・フォセナ先生、ならびにアンケートに協力して下さった10年度入学生の皆さん、本当にありがとうございました。また匿名の査読者の先生から貴重なコメントをいただき、心より御礼申し上げます。

参考文献

- (1) Gardner, R.C., & MacIntyre, P.D. (1993). On the measurements of affective variables in second language learning. *Language Learning*, 43, 157-194.
- (2) Nakamura, H. (2006). L1 Communication apprehension and L2 oral proficiency in Japanese university students. *Studies in Foreign Language Teaching*, 28, 199-207.
- (3) Andrew, G. & Cutler, J. (1974). Stuttering therapy: The relation between changes in symptom level and attitudes. *Journal of Speech and Hearing Disorders*, 39, 312-319.
- (4) Klopff, D.W. (1984). Cross-cultural apprehension research: A summary of Pacific Basin studies. In J.A. Daly & J.C. McCroskey (Eds.). *Avoiding communication: Shyness, reticence and communication apprehension*. Beverly Hills: Sage.
- (5) Klopff, D.W., & Cambra, R. E.. (1979). Communication apprehension among college students in America, Australia, Japan, and Korea. *Journal of Psychology*, 102, 27-31.
- (6) McCroskey, J. C., Fayer, J. M., & Richmond, V.P. (1985). Don't speak to me in English: Communication apprehension in Puerto Rico. *Communication Quarterly*, 33, 185-192.

Appendix : MODIFIED ERICKSON SCALE OF COMMUNICATION ATTITUDES (S-24)

Directions: Mark the “true” column with a check (✓) for each statement that is true or mostly true for you and mark the “false” column with a check (✓) for each statement which is false or not usually true for you. (日本語でのコミュニケーションに関する質問です。各質問について当てはまる場合、どちらかという当てはまる場合には TRUE に、当てはまらない、どちらかという当てはまらない場合には FALSE にチェックしてください)

TRUE or FALSE

1. I usually feel that I am making a favorable impression when I talk.
(人と話をする時に自分は好ましい印象を与えていると思う)
2. I find it easy to talk with almost anyone.
(ほとんど誰とでも気楽に話せる)
3. I find it very easy to look at my audience while speaking to a group
(小集団を前に話すとき、聴衆の目を見て気軽に話すことができる)
4. A person who is my teacher or my boss is hard to talk to.
(先生や上司とは話しづらいと感じる)
5. Even the idea of giving a talk in public makes me afraid.
(人前で話すと考えただけでも怖くなる)
6. Some words are harder than others for me to say.
(他のことばに比べ言いにくいと感じることばがある)
7. I forget all about myself shortly after I begin a speech.
(人前で話し始めるとすぐに冷静さを失う)
8. I am a good mixer.
(自分は社交的である)
9. People sometimes seem uncomfortable when I am talking to them.
(自分が誰かに話しかけるとその人の居心地が悪そうだと感じることもある)
10. I dislike introducing one person to another.
(ある人を別の人に紹介するのは好きではない)
11. I often ask questions in group discussions.
(グループで話し合いをする時、よく質問をする)
12. I find it easy to keep control of my voice when speaking.
(話をする時に自分の声を容易にコントロールできる)
13. I do not mind speaking before group.
(小集団の前で話をするのは平気である)
14. I do not talk well enough to do the kind of work I would really like to do.
(自分が本当にやりたいことをしようとしても話す能力が十分でないと感じる)
15. My speaking voice is rather pleasant and easy to listen to.
(自分の話す声はかなり聞きやすいと思う)
16. I am sometimes embarrassed by the way I talk.
(自分の話し方に困惑することが時々ある)
17. I face most speaking situations with complete confidence.
(たいいていの場合100パーセントの自信を持って話すことができる)
18. There are few people I can talk with easily.
(話しやすいと感じる人はほとんどいない)
19. I talk better than I write.
(書くよりも話すほうが得意である)
20. I often feel nervous while talking.
(話す時によく緊張する)
21. I find it hard to talk when I meet new people.
(初対面の人と話すのは苦手だ)
22. I feel pretty confident about my speaking ability.
(自分の話す能力についてかなり自信がある)
23. I wish that I could say things as clearly as others do.
(他の人のように明確に話せたらなあと思う)
24. Even though I knew the right answer, I have often failed to give it because I was afraid to speak out.
(授業中正しい答えが分かっているにもかかわらず発言するのが怖くて言い出せないことがよくある)

* The Erickson S-24 Scale of Communication Attitudes. from Andrew, G & Cutler, J. (1974).

(受付日2011年5月31日 受理日2011年9月26日)